石上乙麻呂卿、土左国に配さるる時の歌三首
并せて短歌

一〇一九番
石上　布留の尊は　たわやめの　惑ひに因りて　馬じもの　縄取り付け　鹿じもの　弓矢囲みて　大君の　命恐み　天離る　夷辺に罷る　古衣　真土山より　帰り来ぬかも

一〇二〇番

一〇二一番
大君の　命恐み　さし並ぶ　国に出でます　はしきやし　我が背の君を　かけまくも　ゆゆし恐し　住吉の　現人神　舟舳に　うしはきたまひ　着きたまはむ　島の崎々　寄りたまはむ　磯の崎々　荒き波風にあはせず　つつみなく　病あらせず　速けく　帰したまはね本の国辺に

一〇二二番
父君に　我は愛子ぞ　母刀自に　我は愛子ぞ　参ゐ上る　八十氏人の手向する　恐の坂に　弊奉り　我はぞ追へる　遠き土左道を

反歌一首

一〇二三番
大崎の　神の小浜は　狭けども　百舟人も　過ぐといはなくに